

スキー競技選手の「レジャー機能」に関する研究

—LDB テストによる評価から—

竹腰 誠*・野村 一路**・木村直人***・大出一水****

(平成 5 年 11 月 18 日受付, 平成 6 年 2 月 17 日受理)

The Research to Ski Athlete's "Leisure Function"

—It was appraised "Leisure Diagnostic Battery"—

Makoto TAKEGOSHI, Ichiro NOMURA, Naoto KIMURA and Kazumi OHDE

The purpose of to research "The Perceived Freedom in Leisure" on top ski athletes who are major of physical education by using check sheets. We examine the difference of level which cause influences to individual's leisure function.

Our study's subjects are three kind of ski clubs of the Nippon College of Physical Education. They are 110 people in total.

The research was held since June 28th, 1993 to October 15th, 1993 and official number was 106 votes and valid collect rate was 96.4%.

Our skier was leveled according to point and technical examination of the Ski Association of Japan (SAJ) and we divide three groups; athlete 1 group, athlete 2 group and control group.

We used "The Leisure Diagnostic Battery" to measure perceived freedom in leisure which was developed by P. Witt and G. Ellis.

From the results of the research, we found that the scores of the perceived freedom rises as the three groups improves. The average score of athlete 2 group was 3.54(±0.41), control group was 3.57(±0.37) and athlete 1 group, it was 3.21(±0.44). There was also a lot of difference in athlete 1 group and other group.

Ski athlete 1 has more problem that time and money than athlete 2 and control group. It was influenced by their surroundings. "Leisure Function" was affected by life style.

1. 研究の動機と目的

近年, スキー人口は増加の一途をたどり, 現在では 1700 万人を越え, その大半は大学生を中心とした二十代の若者たちでしめられている¹⁾. 各大学においては, 体育実技等でスキーを採用しているところがみられているほか, クラブの活動等も盛んで, 全日本学生スキー連盟への登録校だけでも約 200 校の大学があり, その他登録されているクラブ以外に競技系スキーサークルや, 基礎スキー技術の習得を目的としたクラブ・サークル等も多数見られている。また施設面では, 毎年 10 ヶ所前後のスキー場が新設され²⁾, 夏場でも滑走可能な室内スキー場が建設されるなどスキーに対する需要は益々増えつつ

ある。

一方, スキーというスポーツは活動の場が積雪が望める山岳地域に限られており, 活動期間も冬期間 4 カ月に集中している。

特に競技選手にとっては, 12 月中旬から 4 月の上旬までの間に数多くの競技会が組み込まれており, 事前の雪上トレーニング期間を考えれば, 選手の滑走日数は 1 シーズン 120 日前後におよんでいる。また, 近年注目されている「スキー技術選手権」等のスキー技術の優劣を競う競技会に参加する選手においても, 同様なトレーニング期間や滑走日数を必要としており, 競技系・基礎技術系ともにシーズン中のスキー選手の活動は非常に多忙

* スポーツマネジメント研究室, ** レクリエーション学研究室, *** 衛生学公衆衛生学研究室, **** 野外方法(雪上)研究室

表1 対象者の特性

	所属クラブ	SAJポイント	滑走日数	競技会	SAJ技能資格	活動費用	スキー指導による報酬
競技選手 1	競技スキー部	50.0 未満	約120 日	約30 試合		非常に多い	無し
競技選手 2	競技スキー部及び 基礎スキーサークル	50.0 以上 150.0 以下	約100 日	約10 試合	1 級以上	多い	有り
対照群	基礎スキーサークル	無し	約100 日	約3 試合	2 級以下	多い	有り

なものとなっている。

筆者らの研究によれば、一般スキーヤーの場合、スキー技能の向上に伴い、余暇を活用する能力（レジャー機能）が高まる傾向が明らかになった³⁾。しかしながら一般上級スキーヤーより技能的には上回ると見られる競技選手においては、スキー技術習得を通しての余暇を活用する能力（レジャー機能）に対して、どのような影響を及ぼしているかは、いまだ十分明らかにされていない。

現在大学生として技術的にはトップレベルにある競技選手のレジャー機能と他の一般上級スキーヤーとを比較検討することによって、競技選手とレジャー機能の関係を問うことは重要であろう。

そこで、本研究の目的は、体育系大学において日本のトップレベルにあるスキー競技選手とその対照群である上級スキーヤーとに対してレジャー機能の調査を行い、差異を明らかにし、その原因についてレジャー体験の阻害要因から比較・検討を加えることである。

2. 方 法

(1) 調査方法

本研究の対象は、日本体育大学の学友会スキー部（アルペン）・同基礎スキー研究会、同デンストレーションスキー同好会のスキーサークルに在籍している学生、合計110名とした。

調査は1993年6月28日から10月15日迄の期間で実施され、有効回数は106票で、有効回収率は96.4%であった。

また本研究では、性別・年齢・所属クラブ・SAJポイント・現在のスキー関連所持資格等、被験者の属性についても調査した。

(2) サンプル区分

本研究における調査対象者は、各調査票に記入された属性から、次のように区分した。

(財) 全日本スキー連盟（以下 SAJ）の競技ポイント

（以下 SAJ ポイント）が 50.0 点未満の学生を競技選手 1 とした。次に、SAJ ポイントが 50.0 点以上 150.0 以下、または SAJ の準指導員資格以上あるいは同技能検定 1 級以上を取得している学生を競技選手 2 とし、SAJ 技能検定 2 級以下の学生を対照群とした。

表 1 にこれら対象者の特性に関して、それぞれの項目をあげて示した。滑走日数・競技会数は、そのシーズンにおける活動状況を示しており、活動経費・スキー指導による報酬は、経済的な特性を示している。

SAJ では、SAJ ポイントが 50.0 点未満の選手に対して全日本選手権をはじめとする国内の主要国際レースへの参加権を与えているため、SAJ ポイントが 50.0 点未満のサンプルを本研究においてはトップレベルにある競技スキーヤーと判断した。

(3) LDB テスト概要

本研究では調査対象者のレジャー機能を測定する方法として、Witt らが開発した“The Leisure Diagnostic Battery”（以下 LDB テスト）を用いた⁴⁾。

レジャー機能を測定する方法としては、この LDB テストをはじめとして、「デザインする時間」⁵⁾ や「ゆとりを演出する余暇生活プラン」⁶⁾ 等の著書でいくつか紹介されているが、本研究では、「余暇活動は個人の内的欲求を基本とし、自由な活動のなかでのレジャー機能を考える」⁷⁾ という Witt らの基本的な考え方から、LDB テストを調査票として採用した。

このテストは、財団法人日本レクリエーション協会より「余暇生活診断テスト」として翻訳・出版されており、本調査では、ショートフォームバージョン C を用いた⁷⁾。

また同時に LDB テストのスケール F（レジャー体験の阻害要因を探るテスト）も行った^{資料 2)}。

LDB テストのショートフォームバージョン C は 25 問の質問項目で構成されており、記入方法は、各設問にたいして A: 強くそう思う, B: そう思う, C: どちらでもない, D: そう思わない, E: 全くそう思わない, の 5 段階

表2 属性別サンプル構成 (人)

	全体	男性	女性
全体	106 (100.0)	72 (67.9)	34 (32.1)
競技選手1	14 (100.0)	9 (64.3)	5 (35.7)
競技選手2	62 (100.0)	47 (75.8)	15 (24.2)
対照群	30 (100.0)	16 (53.3)	14 (46.7)

注：()内は(%)

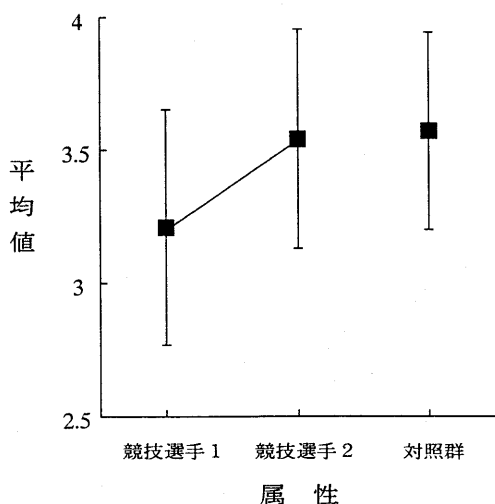


図1 属性別レジャー機能の平均値

3. 結果

表2に属性別と男女別のサンプル構成を示した。

有効回答数106名の属性別サンプルとして、競技選手1は14名(13.2%)、競技選手2は62名(58.5%)、対照群は30名(28.3%)であった。男女別の構成を見ると競技選手1には男子9名(64.3%)女子5名(35.7%)、競技選手2には男子47名(75.8%)、女子15名(24.2%)、対照群には男子16名(53.3%)、女子14名(46.6%)となっている。

男女別にレジャー機能を比較すると、男子3.50(±0.40)、女子3.52(±0.43)と差が見られず、先行研究と同様の結果³⁾となった。

図1に属性別のレジャー機能の平均値と標準偏差を示した。

競技選手2は3.54(±0.41)、対照群では3.57(±0.37)と平均値には差は認められないが、競技選手1になると3.21(±0.44)と他のグループよりかなり低いスコアであった。

表3は属性別におけるレジャー機能の平均値の差の検定結果を示したものである。

競技選手1は競技選手2との間に5%の水準で、また対照群とのあいだに1%の水準で統計的な差が見られた。競技選手2との対照群との間では、検定結果に有意な差は認められなかった。

次に表4は、レジャー機能の阻害要因を8つのスケールにまとめそれぞれの平均値とその差の検定結果を、属性別に示したものである^{7), 資料2, 3)}。

レジャー体験における阻害要因の項目は、要因1: コミュニケーションに関する障害、2: 社会的な障害、3: 決断に関する障害、4: 機会に関する障害、5: 動機に関する障害、6: 能力に関する障害、7: 経済的な障害、8: 時間的

評価により行う^{資料1)}。

採点方法は、選択肢のAに対する回答を5点、以下4, 3, 2, 1点とスコア化し、全ての設問の合計点を設問数で除したものがレジャー機能のスコアとなる。

同じように、スケールFには24の設問があり、それらはスケールFのスコアボックス^{資料3)}で8つのサブスケールにまとめられる。サブスケールごとのスコアは、スコアボックスの各設問番号ごとのスコアを足して、質問数で除したものをサブスケールの小計として用いた。

(4) スコアの分析、検定方法

スコアの分析は、①属性別にみたレジャー機能、②属性別にみた阻害要因サブスケールごとのスコアから行い、それぞれの検定は平均値の差の検定(t-test)によった。

表3 属性別平均値の差の検定

	競技選手 1	競技選手 2	対照群
競技選手 1 (N=14)		※	※ ※
競技選手 2 (N=62)	2.62		
対照群 (N=30)	2.96	0.37	

注1：表内の数字はt値

注2：※※は1%、※は5%で有意

表4 属性別障害要因ごとの平均値

()=SD

	要因1	要因2	要因3	要因4	要因5	要因6	要因7	要因8
全体平均 (N=106)	3.57 (0.83)	3.61 (0.54)	3.23 (0.63)	3.35 (0.83)	3.42 (0.60)	3.46 (0.57)	2.50 (0.92)	2.91 (0.83)
競技選手 1 (N=14)	3.52 (0.84)	3.36 (0.56)	2.90 (0.71)*	3.02 (0.78)	3.10 (0.67)*	3.24 (0.59)	2.02 (0.80)*	2.43 (0.70)*
競技選手 2 (N=62)	3.64 (0.85)	3.67 (0.54)	3.28 (0.60)	3.36 (0.84)	3.48 (0.60)	3.50 (0.58)	2.57 (0.94)	3.05 (0.82)
対照群 (N=30)	3.44 (0.79)	3.62 (0.52)	3.24 (0.65)	3.47 (0.81)	3.48 (0.55)	3.49 (0.54)	2.54 (0.90)	2.86 (0.84)

注1：要因1はコミュニケーションに関する障害、2は社会的な障害、3は決断に関する障害、4は機会に関する障害、5は動機に関する障害、6は能力に関する障害、7は経済的な障害、8は時間的な障害

注2：*は5%で有意に差が認められたもの

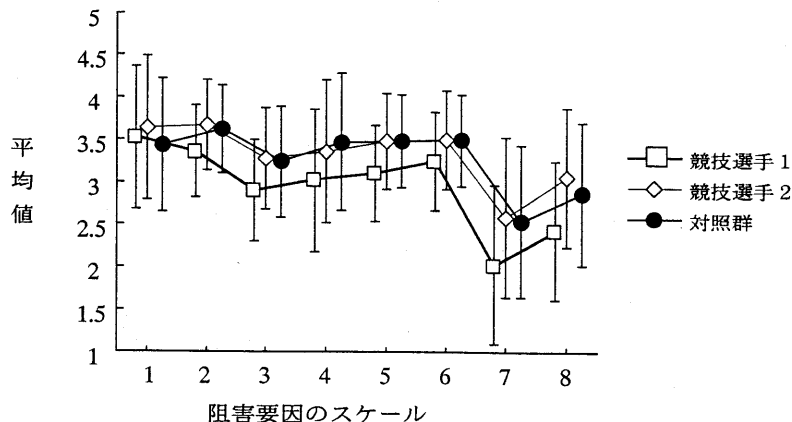


図2 属性別障害要因の平均値

な障害、を意味している。

次に、平均値が低く示された障害要因は、決断に関する障害 3.23(±0.63)と機会に関する障害 3.35(±0.83)で

あった。

属性別に見ると、競技選手1の各要因の平均値はコミュニケーションに関する障害を除いて、属性中1番低

く示されている。特に、経済的な障害 $2.02(\pm 0.80)$ と時間的な障害 $2.43(\pm 0.70)$ は他の属性よりもかなり低く示されており、差の検定においても競技選手2との間に5%の水準で統計的な差が認められた。そのほかに差の認められた阻害要因は決断に関する障害で、競技選手1, $2.90(\pm 0.71)$ と競技選手2の $3.28(\pm 0.60)$ との間に、また動機に関する障害も競技選手1が $3.10(\pm 0.67)$ と競技選手2, $3.48(\pm 0.60)$ の間で統計的な差が認められた。

対照群の平均値は、競技選手1の平均値との統計的な差は認められなかった。しかし、コミュニケーションに関する障害では属性別で一番低いスコア $3.44(\pm 0.79)$ が認められており、競技選手1より低い数値が示された唯一の阻害要因となっている。

図2は属性別阻害要因の平均値を示したものである。属性別のグラフの形状はほぼ同様の傾向が現われているが、競技選手1のスコアが全体的に低く示されている。阻害要因別にみると、コミュニケーションに関する障害(競技選手1, 3.52 ± 0.84 , 競技選手2, 3.64 ± 0.85 , 対照群, 3.44 ± 0.79)と社会的な障害(競技選手1, 3.36 ± 0.56 , 競技選手2, 3.67 ± 0.54 , 対照群, 3.62 ± 0.52)は各属性とも高いスコアが示されている。逆に各属性が低いスコアを示しているのは、経済的な障害(競技選手1, 2.02 ± 0.80 , 競技選手2, 2.57 ± 0.94 , 対照群, 2.54 ± 0.90)と時間的な障害(競技選手1, 2.43 ± 0.70 , 競技選手2, 3.05 ± 0.82 , 対照群, 2.86 ± 0.84)の2要因であった。

この結果をまとめると、①レジャー機能では競技選手1と競技選手2・対照群との間に統計的な差が認められ、競技選手2と対照群の間には差は認められなかった。②阻害要因でも4つの項目で競技選手1と競技選手2の間で統計的な差が認められた。しかし、競技選手2と対照群の間では差は認められなかった。

4. 考 察

(1) 対象の特性

本研究における対象者の特性は表1に示されたとおりである。

競技選手1の1シーズンにおける総滑走日数は約120日前後となり、選手活動を行う上での時間的拘束は長くなっている。

競技選手2で、競技スキー部に所属しているものは、競技選手1と同様に11月上旬からの合宿は行っているものの、参加できる競技会数は少ないため、競技選手としての拘束時間は比較的短くなっている。また技術の習得を目的としたスキーサークルに所属しているものは、

12月中旬に滑走を開始しており、3月末までのシーズンにおいて、合宿以外の主な活動は各スキー場でスキー指導であり、かつ強制ではないため、比較的自由的な時間を有している。

対照群は、競技選手2のサークル所属の学生と同じく、スキーシーズンの滑走開始は、12月中旬からである、合宿以外の主な活動も各スキー場でのスキー指導である。こちらも強制ではないため、かなり自由な時間を有している。

(2) 各特性から見たレジャー機能

本調査では各競技レベルの違いがレジャー機能に及ぼす影響について検討した結果、スキーを専門として行っている者は一定の競技レベルに達するとレジャー機能が低くなる傾向をみせた。

筆者らは、「スキーという活動を行うためには、さまざまな準備や計画性、知識等が必要となり、さらにその活動経験を重ねることにより、スキー技能の向上のみならず、日常生活における余暇活動をコントロールする能力(レジャー機能)にも影響を及ぼす。」³⁾とし、スキー技能の向上がレジャー機能をも向上させると考察している。しかしながら今回の調査ではそれと異なる傾向が認められた。

この原因として対象者の相違があげられる。すなわち先行研究で調査した対象者は、レジャー・レクリエーションといった「楽しみとしてのスキー」を行っている学生であった。それに対し、本研究での対象者は競技会に参加し好成績をあげることが目標としている学生である。したがって、スキーに対する認識度は両対象者間(競技者1 vs. 競技者2・対照群)で全く異なり、目的意識の相違がレジャー機能にも何らかの影響を与えるのかもしれない。

阻害要因の検定結果では、時間的及び経済的な要因において低い値が示されていた。そこで競技選手1と競技選手2、対照群のスキーシーズン中における生活を見ると、競技選手1は競技生活主体、競技選手2及び対照群は競技生活のある程度行うものの、その活動期間は短く、自由時間もあり、スキー技術の習得と技術指導を主に行っている。したがって競技選手1においては、競技会日程の過密さから自由になる時間が少なく、拘束されているといえるだろう。その背景には、競技会そのものや、それにかかわる大学やスキーマーカーの合宿等も大きく関与している。これら競技会や合宿等の参加は一方において自分の意志に関係なく参加しなければならない場合もあり、このことが長期間にわたる時間的拘束を生じさせているのかもしれない。

また競技選手1は競技会の出場や移動にともない、経済的な問題を抱えている。ワールドカップやオリンピックに出場するようなナショナルチームのメンバーに指定されている選手は、SAJからの経費補助が受けられる。しかしながら、本研究の対象者に指定選手はおらず、すべての合宿費・遠征費・競技会の参加費等はすべて自己負担となる。加えて、一般的にスキーという活動の特性上、スキー板・ブーツ等の用具費や競技会・合宿などでかける交通・宿泊費は他のスポーツ種目と比較しても群を抜いており、一般スキーヤーの年間活動費用で比較しても、全スポーツ種目中第2位の高い費用を必要とする活動である¹⁾。

競技選手2・対照群も多くの費用を必要としているが競技選手1に比べ、参加する競技数が少ないことから交通・宿泊費といった活動費が安くなっている。また、時間的な余裕があるため、スキー指導等によって報酬を得ることも可能となる。

したがって、競技選手1に見られるスキーシーズン中の生活状況は競技選手2・対照群に比べて時間的拘束や経済的な面においてその負担は大きいものである。そして生活状況の違いが本調査における阻害要因の時間的及び経済的な面において差異（低下）を生じさせた原因の一つであると思われる。

以上のことから、レジャー機能に及ぼす因子は多種多様である。本調査の結果は先行研究³⁾と異なり、必ずしもスキー技能の向上に対して一義的に高いレジャー機能に結びつくものではなかった。したがってレジャー機能への影響（向上）には、本研究で示されたごとく、たと

えば対象者の目的意識や、その時の生活状況における時間的拘束や経済的な負担を含めたライフスタイル等、数多くの因子が相互的に関与しそれらのバランスによって決められるものと思われる。

謝 辞

本研究を進めるに当たり、日本体育大学スポーツマネジメント研究室教授 今井 毅先生よりレジャー機能と余暇生活について貴重なご助言をいただき、また調査にご協力ををいただいた日本体育大学の学生諸君にも厚くお礼を申し上げ、謝辞と致します。

引用・参考文献

- 1) (財)余暇開発センター編：レジャー白書，p. 24 (1992).
- 2) 矢野経済研究所：レジャー産業白書，pp. 338-346 (1991).
- 3) 野村一路，竹腰 誠，木村直人，大出一水：スキー技能レベルの差異が各個人のレジャー機能に与える影響，日本体育大学紀要 23, 37-48 (1993).
- 4) Peter A. Witt and Gary D. Ellis: The Leisure Diagnostic Battery Users Manual, Venture Publishing Inc., 1989.
- 5) 藪田碩哉：デザインする時間，中央法規出版刊 (1989).
- 6) 浅野 晃：ゆとりを演出する余暇生活プラン，(財)日本レクリエーション協会刊 (1990).
- 7) (財)日本レクリエーション協会：余暇生活診断テスト実施マニュアル，pp. 14-20 (1992).
- 8) 浮田千枝子，西麻里子，藪田碩哉：余暇生活診断テスト日本版に関する予備研究，自由時間研究，p. 128 (1993).

資料 1

[ワークシート] ショートフォーム・バージョン B

記入方法：このスケールは、あなたのレクリエーションやレジャー活動に対して、自身がどう感じているかを問うものです。設問を読んで、あなたの気持ちにあてはまる記号に○をつけてください。

.....
 選択記号：A=強くそう思う B=そう思う C=どちらでもない
 D=そう思わない E=全くそう思わない

- 1: 私は、自分のレクリエーション活動がとても欠かせない : A B C D E
ものだと感じる。
- 2: 私は楽しいレクリエーション活動をたくさん知っている。 : A B C D E
- 3: 私は、一緒にレクリエーション活動を行っている人が上 : A B C D E
手になるようにアドバイスできる。
- 4: 私は、自分のやりたいレクリエーション活動をする能力 : A B C D E
をもっている。
- 5: レクリエーション活動に夢中になっているとき、私は何 : A B C D E
でもできそうな気分で見られる。
- 6: 私にとっては、参加してみたいレクリエーション活動を : A B C D E
選びだすことは簡単なことだ。
- 7: レクリエーション活動中に、私は自分により好感をもつ : A B C D E
てもらえるように振るまえる。
- 8: 私のレクリエーション活動は、新しい人との出会いをも : A B C D E
たらしてくれる。
- 9: 私は自分の望みどおりに、おもしろいレクリエーション : A B C D E
活動を行うことができる。
- 10: レクリエーション活動中に、私はみんなが楽しくなるよ : A B C D E
うに振るまうことができる。
- 11: 私は誰とレクリエーション活動するかを、たいてい自 : A B C D E
分から決める。
- 12: 私は、みんなと一緒にするレクリエーション活動が得意 : A B C D E
である。
- 13: レクリエーション活動を行っているとき、私は創造的に : A B C D E
なれる。
- 14: 私は、自分のやっているたいていの活動が得意だ。 : A B C D E
- 15: 私はレクリエーション活動を通して、みんなを楽しませ : A B C D E
ることができる。
- 16: レクリエーション活動の最中に、自分がそれにのめりこ : A B C D E
んでいると感じられるときがある。
- 17: 私はその人が望んでいなくても、説得してレクリエーシ : A B C D E
ョン活動に引き込むことができる。
- 18: 私はたいていの活動は、やってみて楽しいと思う。 : A B C D E
- 19: 私は、新しい友達がつくれるようなレクリエーション活 : A B C D E
動に参加している。

資料1 (続 き)

- 20 : 私は、レクリエーション活動をしているとき、何かよい : A B C D E
ことを実現させることができる。
- 21 : レクリエーション活動中に、私は自分以外の何者にも支 : A B C D E
配されない時間を実感することがある。
- 22 : 私と一緒に活動することによって、回りの人を楽しませ : A B C D E
ることができる。
- 23 : 私は不安なときに、自分を落ち着かせてくれるレクリエ : A B C D E
ーション活動をしている。
- 24 : 私はレクリエーション活動中に、ときどき自分のしてい : A B C D E
ることに興奮する。
- 25 : 私は、レクリエーション活動をすることで、たいていよ : A B C D E
い時間を過ごすことができる。

資料2

[ワークシート] ロングフォーム・バージョンC

スケールF:レジャー体験の阻害要因

記入方法：このスケールは、あなたのレクリエーションやレジャー活動に対して、自身がどう感じているかを問うものです。設問を読んで、あなたの気持ちにあてはまる記号に○をつけてください。

選択記号：A=強くそう思う B=そう思う C=どちらでもない
D=そう思わない E=全くそう思わない

- 1：私にとって、他人に話しかけることは容易なことだ。 : A B C D E
- 2：私には、レクリエーション活動を一緒にしてくれる友達 : A B C D E
がたくさんいる。
- 3：私にとって、自分が楽しくなれることを見出すことは容 : A B C D E
易なことである。
- 4：人々はしばしば私に、一緒にレクリエーション活動をし : A B C D E
てほしいと頼みにくる。
- 5：好きなときに遊べる公園が身近にある。 : A B C D E
- 6：私はたいていの場合、一度始めた活動は最後まで行う。 : A B C D E
- 7：私は、各種のレクリエーション活動の進め方を知ってい : A B C D E
る。
- 8：私は、好きなレクリエーション活動をするためのお金を : A B C D E
充分にもっている。
- 9：私には、自由になる時間がたくさんある。 : A B C D E
- 10：各種のレクリエーション活動ができる環境にあるとき、 : A B C D E
私は何を行うか、あまり迷わない。
- 11：私は自分の考えていることや感じていることを、ためら : A B C D E
うことなく他人に話すことができる。
- 12：周囲の人達がレクリエーション活動をするとき、たいて : A B C D E
い私と一緒に誘ってくれる。
- 13：私には、やりたいレクリエーション活動をするお金が充 : A B C D E
分にある。
- 14：私は今すぐにも、新しい活動を始めることができる。 : A B C D E
- 15：ある問題に対して複数の答が用意してあるとき、私は容 : A B C D E
易に1つの答を選ぶことができる。
- 16：私には、やりたいレクリエーション活動をする時間は充 : A B C D E
分にある。
- 17：レクリエーション活動のできる場所が、自分の近くにた : A B C D E
くさんある。
- 18：どんな課題であっても、私はたいてい1つ以上の答を思 : A B C D E
いつくことができる。
- 19：私にとって、自分のやりたいレクリエーション活動に参 : A B C D E
加することは容易なことである。
- 20：私の家庭の周辺には、退屈させないさまざまなことがた : A B C D E
くさんある。

資料2 (続 き)

- 21: 私は、自分がやりたいレクリエーション活動のために多 : A B C D E
くのお金を費やすことができる。
- 22: 私は、何か新しいことに立ち向かうことが嫌ではない。 : A B C D E
- 23: 仕事などの用事で、自分がやりたいレクリエーション活 : A B C D E
動に参加できないということはない。
- 24: 私は、集団の中で気楽に話ができる。 : A B C D E

.....
[スケールG]に進んでください。

資料3 スケールF スコアボックス

サブスケール	I コミュニケーション に関する障害			II 社会的な障害			III 決断に関する障害			IV 機会に関する障害		
	設問項目	1	11	24	2	4	12	10	15	18	5	17
スコア												
小計スコア												

サブスケール	V 動機に関する障害			VI 能力に関する障害			VII 経済的な障害			VIII 時間的な障害		
	設問項目	3	6	14	7	19	22	8	13	21	9	16
スコア												
小計スコア												